

# 大学生新入生の無気力傾向に関する一考察

## —ソーシャル・サポート、自己開示傾向との関連—

### Relationships between Enervation, Social Support and Self-disclosure of University Freshmen

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了

浦 辺 諒 子

Ryoko Urabe

#### I. 問題と目的

Walters(1961)は、多くの学生が大学時代に経験するような一時的な無気力とは異なる、特有の無気力を占めず学生が存在を指摘し、それをスチューデント・アパシーと呼んだ。わが国では 1960 年代以降、大学進学率が増加する一方で大学生の留年が問題視されるようになった。その中で学業に対して慢性的な無気力状態に陥り、休学や留年を繰り返し、結局は退学になっていく学生の存在が注目を集めるようになった。丸井（1967）はそのような現象を「意欲減退型留年」として、その急増を指摘している。それ以来、わが国では前述のスチューデント・アパシーという名称が定着し、様々な研究がなされてきた。その研究の多くは主に人格障害レベルの臨床的研究であるが、これに対し鉄島（1993）は、一般学生の無気力を「アパシー傾向」として検討した研究を行っている。下山（1995）は鉄島の研究を踏まえた上で、日本の大学生の無気力は「一時的退行による思春期のやり直しという積極的な発達の意味がある」と考え、人格障害レベルのアパシーと一般の大学生の無気力を区別する必要があると指摘している。

さて、福岡（2000）はソーシャル・サポートが大学生の無気力を防ぐ効果があると示唆する研究を行っている。ソーシャル・サポートとは「ある人を取り巻く重要な他者から得られる様々な形の援助のことであり、それはその人の健康維持・増進に重大な役割を果たす」とされる（久田,1987）。

また、福岡（2007b）は自己開示が多いほど、友人から多くのサポートを受けているという指摘をしている。榎本（1997）によると、自己開示について心理学の領域で最初に研究を行ったのは臨床心理学者の Jourard,S.M である。Jourard のいう自己開示とは「個人的な情報を他者に知らせる行為」あるいは、「自分自身をあらわにする行為であり、他人たちが知覚しうるように自身を示す行為」のことを指す。そして、日常生活において重要な他者に十分に自己開示することが健康なパーソナリティの指標であり、精神的健康にとって重要な条件であると考えた。

そこで、本研究では大学生新入生の無気力傾向と知覚されたサポート、実行されたサポートの関連について時系列を追って検討することを主な目的とする。新入生を対象とする理由は、新入生は大学に入学して間もないため、人格障害レベルのアパシーであることはほとんど考えられないこと、新入生の無気力傾向を追跡することで大学生が無気力になる流れを把握し、その実態を浮き彫りにできればと考えたからである。また、青年期後期にあたる大学生は、対人関係の中心が親子関係から友人関係へと移行する時期でもある。そこで本研究ではソーシャル・サポートについて、サポート源を家族と友人の2つに区別し、その違いを検討する。

遠藤（1989）はこれまでの多くの測定方法は「開示者が重要な他者だけに限定され、よく遭遇する初対面の人との社会的な場面などが含まれていない」ことを指摘している。筆者は大学という新しい環境に直面している新入生にとって、遠藤が指摘するような、初対面の人に対する自己開示意向が、ソーシャル・サポートの形成過程に影響を与えるのではないかと考え、自己開示傾向がソーシャル・サポートに与える影響についても検討を加えることにした。

本研究で大学生の無気力傾向やソーシャル・サポート、自己開示傾向について少しでも理解を深め、より適応的な学生生活の一助となればと考えている。

以上の目的をふまえて、本研究では以下の3つの仮説を設定する。

（1）無気力傾向が高い人は、無気力傾向が低い人に比べ、知覚されたサポートが少なく、自己開示傾向は低いだろう。反対に、無気力傾向が低い人は、無気力傾向が高い人に比べ、知覚されたサポートが多く、自己開示傾向は高いだろう。

（2）時間の経過によって無気力傾向が高くなる人は無気力傾向が低くなる人に比べ、実行されたサポートが少ないだろう。反対に、時間の経過によって無気力傾向が低くなる人は無気力傾向が高くなる人に比べ、実行されたサポートが多いだろう。

（3）自己開示傾向が高い人は、自己開示傾向が低い人に比べ、知覚されたサポート、実行されたサポートが多いだろう。反対に、自己開示傾向が低い人は、自己開示傾向が高い人に比べ、知覚されたサポート、実行されたサポートが少ないだろう。

## II. 方法

以上の目的と仮説をもとに、大学生新入生の無気力傾向とソーシャル・サポート、自己開示傾向について、本大学の新入生を対象に3回に渡る質問紙調査を行った。3回の調査を、それぞれ調査1、調査2、調査3とし、以下に詳述する。

### 1. 調査の時期と被験者

調査1：2012年4月末、有効回答数149名

調査2：2012年6月末、有効回答数125名（調査1の有効回答者に対して実施）

調査 3：2012 年 10 月中旬、有効回答数 75 名（調査 1、2 の有効回答者に対して実施）

調査 1～3 はいずれも同様の学生に対する追跡調査であり、全ての調査で回答に不備のないものを有効回答とした。

## 2. 調査の手続き

本大学 1 年生対象の授業時間を利用して協力を依頼し、個別記入式の質問紙に回答を求めた。追跡調査を実施するため、任意で学籍番号または携帯番号下 4 桁の記入を求めたが、回答はいずれも無記名で行われた。

## 3. 質問紙の構成

質問紙は、以下の通りである。

### (1) フェイスシート

学部・学科、学年、年齢、性別、住居形態、サークル所属の有無。

### (2) 意欲低下領域尺度

鉄島（1993）の研究をもとに、下山（1995）が作成した尺度で、一般の大学生の意欲低下状態を測定する尺度。全 18 項目、4 件法。無気力傾向の時系列での変化を調べるため、調査 1～3 に渡り、全く同じ質問紙に回答を求めた。（信頼性係数は調査 1： $\alpha=.73$ 、調査 2： $\alpha=.89$ 、調査 3： $\alpha=.81$ ）

### (3) 知覚されたソーシャル・サポート尺度

福岡（2007）が作成した、知覚されたソーシャル・サポートを測定する尺度。家族と友人について各 10 項目、4 件法。大学入学時点で、新入生がどの程度サポートを得られると知覚しているのか確認するため、調査 1 において回答を求めた。（信頼性係数  $\alpha=.90$ ）

### (4) 開示状況質問紙

遠藤（1989）が作成した、状況を超えた一般的な自己開示傾向と、社会的状況別の自己開示傾向（開示意向）を測定する尺度。全 18 項目、6 件法。（信頼性係数  $\alpha=.89$ ）

### (5) 実行されたソーシャル・サポート尺度

実行されたソーシャル・サポートを測定する尺度。調査 1 で使用した福岡（2007）の「知覚されたソーシャル・サポートを測定する尺度」を筆者が修正して使用。家族と友人について各 10 項目、4 件法。回答に際しては、大学に入学してからの過去 3 か月間、または 6 か月間を思い出して、実際にサポートしてくれる人がいたかどうかについて回答するよう求めた。（信頼性係数は調査 2： $\alpha=.89$ 、調査 3： $\alpha=.92$ ）

### Ⅲ. 結果

仮説の検証を行うため、以下の通り分析を行った。

#### 1. 無気力 3 群別の検討

はじめに、被験者全体を調査 1 の無気力得点の下位 25%・中位 50%、上位 25%で分割して、無気力低群（～23 点）、無気力中群（24～30 点）、無気力高群（31 点～）の 3 群に群分けした。

##### (1) 調査 1 結果

調査 1 の結果について、無気力 3 群別の無気力得点、家族・友人を合わせた全体の知覚されたソーシャル・サポート得点（以下、全体の知覚されたサポート得点とする）、知覚された家族サポート得点、知覚された友人サポート得点、自己開示得点の平均点と標準偏差を算出した（表 1）。

無気力 3 群の間で知覚されたソーシャル・サポート得点、自己開示得点に差が見られるか検討するために、分散分析と多重比較を行った（表 2）。

分散分析の結果、無気力得点は 0.1%水準で有意差が見られた。知覚されたソーシャル・サポート得点は、全体の知覚されたサポート得点は 0.1 %水準、知覚された家族サポート得点は 1%水準、知覚された友人サポート得点は 1%水準で有意差が見られた。自己開示得点は 0.1 %水準で有意差が見られた。

多重比較によって群間の差を確認したところ、無気力得点は無気力低群・無気力中群・無気力高群すべてに 0.1 %水準で有意差が見られ、3 群の独立性が確認された。平均値を比べると、無気力低群、無気力中群、無気力高群の順に無気力得点が高くなっていることがわかる。そのため、無気力得点は無気力低群、無気力中群、無気力高群の順に有意に高いという結果が得られた。

また、全体の知覚されたサポート得点は、無気力低群と無気力中群の間には有意差は見られなかった。無気力中群と無気力高群の間では 5%水準で有意差が見られ、無気力低群と無気力高群の間では 0.1%水準で有意差が見られた。平均値を比べると、無気力中群と無気力高群では無気力高群の方が低く、無気力低群と無気力高群では無気力高群の方が低い。そのため、全体の知覚されたサポート得点は無気力高群が無気力低群・無気力中群よりも有意に低いという結果が得られた。

知覚された家族サポート得点と知覚された友人サポート得点は、無気力低群と無気力中群の間には有意差は見られなかった。無気力中群と無気力高群の間では 5%水準で有意差が見られ、無気力低群と無気力高群の間では 1%水準で有意差が見られた。平均値を比べると、無気力中群と無気力高群では無気力高群の方が低く、無気力低群と無気力高群では無気力高群の方が低い。そのため、知覚された家族サポート得点と知覚された友人サポート得点は、無気力高群が無気力低群・無気力中群よりも有意に低いという結果が得られた。

自己開示得点は無気力低群と無気力中群の間では 5%水準で有意差が見られ、無気力低群と無気力

高群の間では 0.1%水準で有意差が見られた。無気力中群と無気力高群の間には有意差は見られなかった。平均値を比べると、無気力低群と無気力中群では無気力低群の方が高く、無気力低群と無気力高群では無気力低群の方が高い。そのため、自己開示得点は、無気力低群が無気力中群・高群よりも有意に高いという結果が得られた。

表 1 調査 1 における各尺度の無気力 3 群別の平均値 (SD)

N=149	無気力得点	知覚サポート (全体)	知覚サポート (家族)	知覚サポート (友人)	自己開示得点
無気力低群 (N=40)	20.93 (1.93)	69.33 (7.24)	36.83 (3.57)	32.50 (5.19)	68.88 (14.09)
無気力中群 (N=67)	27.07 (2.00)	67.61 (8.90)	35.99 (4.77)	31.62 (5.13)	62.09 (13.19)
無気力高群 (N=42)	34.05 (4.13)	61.95 (10.75)	33.36 (6.64)	28.60 (6.15)	57.74 (10.77)

表 2 分散分析と多重比較の結果

	無気力得点	知覚サポート (全体)	知覚サポート (家族)	知覚サポート (友人)	自己開示得点
分散分析	F(2,146)=232.96 P<.001***	F(2,146)=7.72 P<.001***	F(2,146)=5.35 P<.01**	F(2,146)=6.05 P<.01**	F(2,146)=7.87 P<.001***
多重比較	低群<中群*** 中群<高群*** 低群<高群***	低群>中群NS 中群>高群** 低群>高群***	低群>中群NS 中群>高群* 低群>高群**		低群>中群* 中群>高群NS 低群>高群***

\*\*=p<.001、\*=p<.01、\* = p<.05を表す。

## (2) 調査 2 結果

調査 2 の結果について、調査 1 との比較ができるように、被験者全体を調査 1 と同じ無気力 3 群に分割し、無気力低群、無気力中群、無気力高群とする。無気力 3 群別の無気力得点、家族と友人を合わせた全体の実行されたソーシャル・サポート得点 (以下、全体の実行されたサポート得点とする)、実行された家族サポート得点、実行された友人サポート得点の平均値と標準偏差を算出した (表 3)。

調査 1 と同様に、無気力 3 群の間で、無気力得点、実行されたソーシャル・サポート得点に差が見られるか検討するため、分散分析と多重比較を行った (表 4)。

分散分析の結果、調査 1 と同様に、無気力得点は 0.1%水準で有意差が見られた。実行されたソーシャル・サポート得点は、全体の実行されたサポート得点は、5%水準で有意差が見られた。実行された家族サポート得点は有意差は見られなかった。実行された友人サポート得点は 1 %水準で有意差が見られた。

多重比較によって群間の差を確認したところ、無気力得点は調査 1 と同様に無気力低群・無気力中群・無気力高群すべてに 0.1 %水準で有意差が見られ、3 群の独立性が確認された。平均値を比べると、調査 1 と同様に、無気力低群、無気力中群、無気力高群の順に無気力得点が高くなっていることがわかる。そのため、無気力得点は無気力低群、無気力中群、無気力高群の順に有意に高いという結果が得られた。

また、全体の実行されたサポート得点は、無気力低群と無気力中群、無気力中群と無気力高群の間には有意差は見られなかった。無気力低群と無気力高群の間にのみ 5%水準で有意差が見られた。平均値を比べると、無気力低群の方が無気力高群よりも高い。そのため、全体の実行されたサポート得点は、無気力低群が無気力高群よりも有意に高いという結果が得られた。

実行された友人サポート得点は、無気力低群と無気力中群、無気力中群と無気力高群の間には有意差は見られなかった。無気力低群と無気力高群の間にのみ 1%水準で有意差が見られた。平均値を比べると、無気力低群の方が無気力高群よりも高い。そのため、実行された友人サポート得点は、無気力低群が無気力高群よりも有意に高いという結果が得られた。

表 3 調査 2 における各尺度の無気力 3 群別の平均値 (SD)

N=125	無気力得点	実行サポート (全体)	実行サポート (家族)	実行サポート (友人)
無気力低群 (N=36)	23.17(4.02)	66.36(10.62)	33.97(6.29)	32.39(6.05)
無気力中群 (N=57)	28.42(5.29)	64.19(8.81)	33.88(5.42)	30.32(5.41)
無気力高群 (N=32)	33.38(4.64)	59.69(12.07)	31.91(7.56)	27.78(6.34)

表 4 分散分析と多重比較

	無気力得点	実行サポート (全体)	実行サポート (家族)	実行サポート (友人)
分散分析	F(2,122)=38.65 p<.001***	F(2,122)=3.73 p<.05*	NS	F(2,122)=5.26 p<.01**
多重比較	低群<中群*** 中群<高群*** 低群<高群***	低群>中群 NS 中群>高群 NS 低群>高群*	低群>中群 NS 中群>高群 NS 低群>高群 NS	低群>中群 NS 中群>高群 NS 低群>高群**

\*\*\*=p<.001、\*\*=p<.01、\*=p<.05 を表す。

### (3) 調査 3 結果

調査 1、調査 2 と同じように、被験者全体を調査 1 と同じ無気力 3 群に分割し、無気力低群、無気力中群、無気力高群とする。無気力 3 群別の無気力得点、全体の実行されたサポート得点、実行された家族サポート得点、実行された友人サポート得点の平均値と標準偏差を算出した（表 5）。

調査 1、2 と同様に、無気力 3 群の間で、無気力得点、実行されたソーシャル・サポート得点に差が見られるか検討するため、分散分析と多重比較を行った（表 6）。

分散分析の結果、調査 1、2 と同様に、無気力得点は 0.1%水準で有意差が見られた。実行されたソーシャル・サポート得点は、全体の実行されたサポート得点は、有意差は見られなかったものの、10%水準で有意傾向が見られた。実行された家族サポート得点は調査 2 と同様に有意差は見られなかった。実行された友人サポートは、調査 2 では 1%水準で有意差が見られ、調査 3 では 5%水準で有意差が見られた。

多重比較によって群間の差を確認したところ、無気力得点は調査 1、2 と同様に無気力低群・無気力中群・無気力高群すべてに 0.1 %水準で有意差が見られ、3 群の独立性が確認された。平均値を比べると、調査 1、2 と同様に、無気力低群、無気力中群、無気力高群の順に無気力得点が高くなっていることがわかる。そのため、無気力得点は無気力低群、無気力中群、無気力高群の順に有意に高いという結果が得られた。

また、全体の実行されたサポート得点は、無気力低群と無気力中群、無気力中群と無気力高群、無気力低群と無気力高群いずれにおいても有意差は見られなかった。

実行された友人サポート得点は、無気力低群と無気力中群、無気力中群と無気力高群の間には有意差は見られなかった。無気力低群と無気力高群の間にのみ、5%水準で有意差が見られた。平均値を比べると、無気力低群の方が無気力高群よりも高い。そのため、実行された友人サポート得点は、無気力低群が無気力高群よりも有意に高いという結果が得られた。

表 5 調査 3 における各尺度の無気力 3 群別の平均値 (SD)

N=75	無気力得点	実行サポート (全体)	実行サポート (家族)	実行サポート (友人)
無気力低群 (N=21)	22.24 (3.33)	68.81 (10.06)	34.67(6.46)	34.14(5.39)
無気力中群 (N=34)	28.35 (4.83)	65.82(11.87)	34.94(6.71)	30.88(6.35)
無気力高群 (N=20)	33.75(5.87)	61.30(10.65)	32.05(6.82)	29.25(5.36)

表 6 分散分析と多重比較

	無気力得点	実行サポート (全体)	実行サポート (家族)	実行サポート (友人)
分散分析	$F(2,72)=29.77$ , $p<.001^{***}$	$F(2,72)=2.39$ , $p<.10^{+}$	NS	$F(2,72)=3.80$ , $p<.05^{*}$
多重比較	低群<中群 <sup>***</sup> 中群<高群 <sup>***</sup> 低群<高群 <sup>***</sup>	低群>中群 NS 中群>高群 NS 低群>高群 NS	低群>中群 NS 中群>高群 NS 低群>高群 NS	低群>中群 NS 中群>高群 NS
				低群>高群 <sup>*</sup>

\*\*\*= $p<.001$ 、\*\*= $p<.01$ 、\*= $p<.05$ 、+= $p<.10$ を表す。

## 2. 無気力 3 群別の時系列による変化の検討

ここでは、調査 1 から調査 3 までの結果を時系列に沿って比較検討する。

### (1) 無気力得点の変化

まず、無気力得点の変化を時系列で検討するため、調査 1 と調査 2 の無気力得点について無気力 3 群別に対応のある t 検定を行った（表 7、図 1）。その結果、無気力低群は調査 1 と調査 2 の間で 1% 水準で有意差が見られた。平均値を比べると、調査 1 よりも調査 2 の方が高い。つまり、無気力低群は調査 1 時点に比べ、調査 2 時点で無気力得点が有意に高くなっているという結果が得られた。無気力中群は、調査 1 と調査 2 の間で 5% 水準で有意差が見られた。平均値を比べると、無気力低群と同様に、調査 1 よりも調査 2 の方が高い。つまり、無気力中群は調査 1 時点に比べ、調査 2 時点で無気力得点が有意に高くなっているという結果が得られた。無気力高群は調査 1 と調査 2 の間で有意差は見られなかった。つまり、無気力高群は調査 1 時点でも調査 2 時点でも無気力得点に変化はないという結果が得られた。

調査 2 と調査 3 についても同様に、無気力得点について無気力 3 群別に対応のある t 検定を行った（表 8）。その結果、調査 2 と調査 3 の間では無気力低群、無気力中群、無気力高群ともに有意差は見られなかった。つまり、調査 2 時点と調査 3 時点の間では無気力 3 群ともに無気力得点に変化はないという結果が得られた。



表 7 調査 1 と調査 2 の無気力得点の対応のある t 検定

	調査1	調査2	t値
無気力低群(N=36人)	20.97 (1.96)	23.17 (4.02)	-3.252**
無気力中群(N=57人)	26.93 (1.98)	28.42 (5.29)	-2.273*
無気力高群(N=32人)	33.53 (3.28)	33.38 (4.64)	0.261

\*\*= $p<.01$ , \*= $p<.05$  を表す。

図 1 調査 1 と調査 2 の無気力得点の平均値

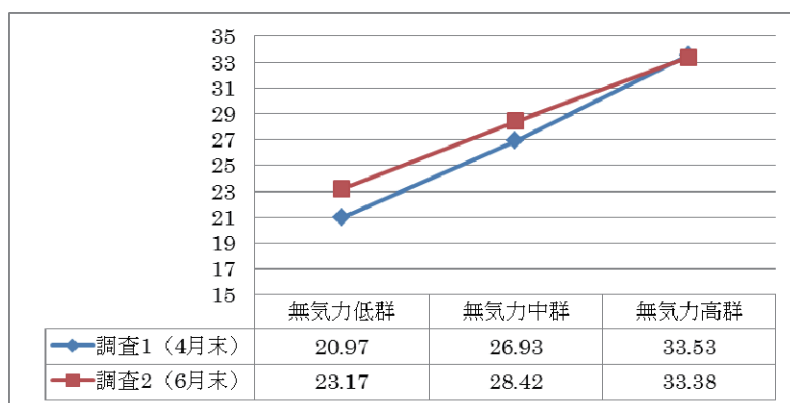


表 8 調査 2 と調査 3 の無気力得点の対応のある t 検定

	調査2	調査3	t値
無気力低群(N=21)	21.76(3.25)	22.24(3.33)	-.879
無気力中群(N=34)	27.76(5.20)	28.35(4.83)	-.765
無気力高群(N=20)	34.60(4.88)	33.75(5.87)	1.039

以上の結果をふまえ、無気力得点の時系列での変化についてより詳しく検討するため、調査 1 と調査 2 の無気力得点について項目別に対応のある t 検定を行った(表 9、10)。その結果、項目 4 は 1% 水準で有意差が見られた。項目 6、7、8 は 0.1% 水準で有意差が見られた。項目 9、10 は 5% 水準で有意差が見られた。平均値を比べると、項目 4、6、7、8、10 は調査 1 時点よりも調査 2 時点の方が無気力得点が有意に高いという結果が得られた。一方、項目 9 は調査 1 時点よりも調査 2 時点の方が無気力得点が有意に低いという結果が得られた。

表 9 無気力得点の項目別の対応のある t 検定（調査 1 と調査 2 の比較）

無気力得点が上がった項目	調査 1	調査 2	t 値
4. 必要な単位以外でも、関心のある授業は取るようにしている	2.26	2.51	-3.163**
6. 授業に出る気がしない	1.57	1.88	-4.217***
7. 朝寝坊などで、授業に遅れることが多い	1.31	1.65	-4.415***
8. なんとなく授業をさぼることがある	1.1	1.46	-5.114***
10. 授業の課題の提出が遅れたり、出さなかったりすることがある	1.54	1.7	-2.088*

\*\*\*= $p<.001$ 、\*\*= $p<.01$ 、\*= $p<.05$  を表す。

表 10 無気力得点の項目別の対応のある t 検定（調査 1 と調査 2 の比較）

無気力得点が下がった項目	調査 1	調査 2	t 値
9. 大学からの連絡事項を見落としてしまうことが多い	2.14	1.95	2.188*

\*= $p<.05$  を表す。

## （2）実行されたソーシャル・サポート得点の変化

続いて、実行されたソーシャル・サポート得点の変化を時系列で検討するため、調査 2 と調査 3 の全体の実行されたサポート得点、実行された家族サポート得点、実行された友人サポート得点について、無気力 3 群別に対応のある t 検定を行った（表 11）。その結果、無気力低群は全体の実行されたサポート得点に 5%水準で有意差が見られた。実行された家族サポート得点には有意差は見られなかった。実行された友人サポート得点は 5%水準で有意差が見られた。平均値を比べると、調査 2 よりも調査 3 の方が高く、無気力低群は調査 2 時点よりも調査 3 時点で全体の実行されたサポート得点と実行された友人サポート得点が有意に高いという結果が得られた。無気力中群は全体の実行されたサポート得点、実行された家族サポート得点、実行された友人サポート得点いずれにおいても有意差は見られなかった。無気力中群と同様に、無気力高群も全体の実行されたサポート得点、実行された家族サポート得点、実行された友人サポート得点いずれにおいても有意差は見られなかった。

表 11 実行されたソーシャル・サポート得点の対応のある t 検定

N=75		調査 2	調査 3	t値
無気力低群(N=21)	全体	66.33(10.75)	68.81(10.06)	-2.112*
	家族	34.43 (6.19)	34.67 (6.46)	-.366
	友人	31.90(6.24)	34.14(5.39)	-2.481*
無気力中群(N=34)	全体	64.24 (9.38)	65.82 (11.87)	-1.127
	家族	33.53 (5.64)	34.94 (6.71)	-1.607
	友人	30.71(5.33)	30.88(6.35)	-.245
無気力高群(N=20)	全体	59.80 (10.96)	61.30 (10.65)	-1.079
	家族	31.95 (7.33)	32.05 (6.82)	-.141
	友人	27.85(4.93)	29.25(5.36)	-1.589

\*=  $p<.05$  を表す。

以上の結果をふまえ、実行されたソーシャル・サポート得点の時系列での変化をより詳しく検討するため、調査 2 と調査 3 の実行されたソーシャル・サポート得点について項目別に対応のある t 検定を行った（表 12、13）。その結果、実行された友人サポートのうち項目 1、6、8 に 5%水準で有意差が見られた。また、実行された家族サポートのうち項目 9 に 5%水準で有意差が見られた。平均値を比べると、項目 1、6、8 は、調査 2 時点よりも調査 3 時点で実行された友人サポート得点が有意に高いという結果が得られた。項目 9 は、調査 2 時点よりも調査 3 時点で実行された家族サポート得点が有意に低いという結果が得られた。

表 12 実行されたサポート得点の項目別の対応のある t 検定

実行されたソーシャル・サポート得点が上がった項目	調査 2	調査 3	t値
1. あなたの気分をなごませたり、くつろがせてくれる人は…	3. 61	3. 75	-2. 299*
友 6. あなたが 1 日以上家を留守にしなければならないとき、	2. 00	2. 29	-2. 309*
人 その間の世話をしてくれる人は…			
8. 身体の具合が思わしくないとき、面倒を見てくれる人は…	2. 48	2. 75	-2. 470*

\*=  $p<.05$  を表す。

表 13 実行されたサポート得点の項目別の対応のある t 検定

実行されたソーシャル・サポート得点が下がった項目		調査2	調査3	t値
家族	9. 必要なとき、あなたに物質的・金銭的な支援をしてくれる人は…	3.92	3.79	2.185*

\*=  $p < .05$  を表す。

### 3. ソーシャル・サポートと自己開示傾向の関連

筆者はソーシャル・サポートを得るための手段として、自己開示が重要であると考えた。すでに無気力3群別のソーシャル・サポート得点、自己開示得点は前述しているが、ここで両者の関連を別の角度から再検討することとする。

#### (1) ソーシャル・サポートと自己開示傾向の関連

まず、ソーシャル・サポートと自己開示の関連を検討するため、相関分析を行った（表 14）。知覚されたサポート得点と自己開示得点の間には 0.1%水準で弱い正の相関関係が見られた。また、実行されたサポート得点と自己開示得点の間には調査2、調査3ともに 0.1%水準で弱い正の相関が見られた。

表 14 ソーシャル・サポートと自己開示の相関分析

		自己開示
調査1 知覚されたサポート	Pearson の相関係数	.300***
	有意確率（両側）	.000
調査2 実行されたサポート	Pearson の相関係数	.408***
	有意確率（両側）	.000
調査3 実行されたサポート	Pearson の相関係数	.402***
	有意確率（両側）	.000

\*\*\*=  $p < .001$  を表す。

#### (2) 自己開示2群別のソーシャル・サポート得点の検討

次に、被験者を調査1の自己開示得点の平均点の上下で分割し、自己開示低群（～62点）と自己開示高群（63点～）に群分けし、自己開示低群と自己開示高群における自己開示得点について t 検定を行った（表 15）。その結果、自己開示低群と自己開示高群の間に 0.1%水準で有意差が見られ、2群の独立性が確認された。平均値を比べると、自己開示高群の方が自己開示低群よりも高い。つまり、自己開示高群は自己開示低群に比べ、有意に自己開示得点が高いという結果が得られた。

表 15 自己開示 2 群別の自己開示得点の t 検定

	自己開示低群 (N=75)	自己開示高群 (N=74)	t値
自己開示得点	52.01 (8.03)	73.50 (7.93)	-16.434***

\*\*\*= $p<.001$  を表す。

自己開示低群と自己開示高群の間で知覚されたソーシャル・サポート得点、実行されたソーシャル・サポート得点に差がみられるか検討するため、自己開示 2 群別に t 検定を行った (表 16)。その結果、知覚されたソーシャル・サポート得点は自己開示低群と自己開示高群の間で 5%水準で有意差が見られた。実行されたソーシャル・サポート得点は調査 2 では 1%水準、調査 3 では 5%水準で有意差が見られた。平均値を比べると、知覚されたソーシャル・サポート得点、調査 2、3 の実行されたソーシャル・サポート得点いずれにおいても、自己開示高群の方が自己開示低群よりも高い。つまり、自己開示高群は自己開示低群に比べ、知覚されたソーシャル・サポート得点、実行されたソーシャル・サポート得点が有意に高いという結果が得られた。

表 16 自己開示 2 群別のソーシャル・サポート得点の t 検定

		自己開示低群	自己開示高群	t値
調査 1	知覚されたサポート(全体)	(N=75)	(N=74)	-2.513*
		64.57 (9.196)	68.41 (9.419)	
調査 2	実行されたサポート(全体)	N=63	N=62	-3.112**
		60.87 (11.13)	66.50 (8.99)	
調査 3	実行されたサポート(全体)	N=40	N=35	-2.475*
		62.63 (13.11)	68.69 (7.71)	

\*\*= $p<.01$ 、\*= $p<.05$  を表す。

### (3) 自己開示 2 群別のソーシャル・サポートの変化

自己開示低群と自己開示高群の間で実行されたソーシャル・サポート得点に時系列での変化が生じるか検討するため、自己開示 2 群別に調査 2 と調査 3 における実行されたソーシャル・サポート得点について対応のある t 検定を行った (表 17)。その結果、自己開示低群は全体の実行されたサポート得点、実行された家族サポート得点、実行された友人サポート得点いずれにおいても有意差は見られなかった。自己開示高群は全体の実行されたサポート得点は 5%水準で有意差が見られた。実行された家族サポート得点では有意差は見られなかった。実行された友人サポート得点では 5%水準で有意

差が見られた。平均値を比べると、自己開示高群の全体の実行されたサポート得点と実行された友人サポート得点は調査 2 よりも調査 3 の方が高い。つまり、自己開示高群は調査 2 時点よりも調査 3 時点の方が全体の実行されたサポート得点、実行された友人サポート得点が有意に高いという結果が得られた。

表 17 実行されたソーシャル・サポート得点の対応のある t 検定

		調査 2	調査 3	t 値
自己開示低群 (N=40)	全体	61.28 (11.04)	62.63 (13.11)	-1.070
	家族	32.40 (6.67)	32.86 (7.45)	-.667
	友人	28.88 (5.74)	29.75(6.80)	-1.153
自己開示高群 (N=35)	全体	66.34 (8.95)	68.69 (7.71)	-2.492*
	家族	34.46 (5.64)	35.49 (5.51)	-1.645
	友人	31.89 (5.16)	33.20(4.51)	-2.346*

\*=  $p<.05$  を表す。

#### IV. 考察

ここでは、I で設定した仮説について、質問紙調査の結果からその検証を行い、その結果について考察する。

##### 1. 仮説 1 の検証

ここでは、仮説 1 の「無気力傾向が高い人は、無気力傾向が低い人に比べ、知覚されたサポートが少なく、自己開示傾向は低いだろう。反対に、無気力傾向が低い人は、無気力傾向が高い人に比べ、知覚されたサポートが多く、自己開示傾向は高いだろう。」について検証を行う。

調査 1 の結果から、無気力傾向を無気力低群、無気力中群、無気力高群の 3 群に分けて比較検討したところ、無気力高群は無気力低群・無気力中群よりも知覚されたサポートが少なく、無気力低群よりも自己開示傾向が低いという結果が得られた。反対に、無気力低群は無気力高群よりも知覚されたサポートが多く、無気力中群・無気力高群よりも自己開示傾向が高いという結果が得られた。

以上の結果から、無気力傾向が高い人は、無気力傾向が低い人に比べ、知覚されたサポートが少なく、自己開示傾向が低いといえる。また、無気力傾向が低い人は、無気力傾向が高い人に比べ、知覚されたサポートが多く、自己開示傾向は高いといえる。したがって仮説 1 は支持された。

先行研究では福岡（2000）が知覚されたサポートが無気力傾向を防ぐ効果があると指摘しており、本研究はその結果を追証するものといえる。

## 2. 仮説 2 の検証

ここでは、仮説 2 の「時間の経過によって無気力傾向が高くなる人は無気力傾向が低くなる人に比べ、実行されたサポートが少ないだろう。反対に、時間の経過によって無気力傾向が低くなる人は無気力傾向が高くなる人に比べ、実行されたサポートが多いだろう。」について、検証を行う。

調査 1、2、3 および時系列による変化の検討の結果から、無気力 3 群別に無気力傾向の推移を検討した。調査 1 と調査 2 を比べると、無気力低群と無気力中群は無気力傾向が上がっており、無気力高群は無気力傾向に変化は見られなかった。そして、調査 2 では無気力低群は無気力高群よりも実行されたサポートが多いという結果が得られている。

調査 2 と調査 3 を比べると、無気力低群、無気力中群、無気力高群いずれも無気力傾向に変化は見られなかった。調査 3 では無気力低群は無気力高群よりも実行されたサポートが多いという結果が得られている。さらに、調査 2 と調査 3 の間で実行されたサポートについての変化を見ると、無気力低群のみ実行された友人サポートが増えていることがわかる。

以上の結果を総合すると、無気力傾向の低い人は実行された友人サポートが多いにも関わらず、4 月末から 6 月末にかけて無気力傾向が上がっているということがわかった。また、無気力傾向が低い人は 6 月末から 10 月にかけて実行された友人サポートが増えても、無気力傾向に変化は見られないということがわかった。なお、今回の調査では、無気力傾向が低くなった群は確認できなかったため、無気力傾向が低くなった人との比較はできないが、仮説 2 はおおむね却下されたといっていよう。そして、時間の経過によって無気力傾向が低くなった人の実行されたサポートについては、残念ながら本研究ではその検証自体が困難であった。

実行されたサポートと無気力傾向の関連について、先行研究では福岡（2007）が「実際に意欲が低下するかどうかは、何らかの経験をした個人が他者と実際におこなう相互作用の性質によっても左右されるであろう。これらの観点からの検討も今後の課題である」と述べている。実際、実行されたサポートに関する実証的な研究は少なく、先行研究との比較は困難であるが、筆者は仮説 2 の検証結果について以下の点から考察を行う。

1 点目は、本研究において無気力傾向が高くなったのは、もともと無気力傾向が低い無気力低群であるということである。2 点目は、無気力低群は無気力傾向が高くなっても、無気力高群よりはその平均値が低いということである。3 点目は、無気力傾向の上昇が見られたのは、4 月末から 6 月末にかけてのみであり、6 月末から 10 月にかけて無気力傾向に変化は見られず、無気力傾向が時間の経過によって高くなり続けるわけではないということである。4 点目は、調査 1 から調査 2 の間に無気力得点が高くなっている項目を見ると、「必要な単位以外でも、関心のある授業は取るようにしている」「授業に出る気がしない」「朝寝坊などで、授業に遅れることが多い」「なんとなく授業をさぼることがある」「授業の課題の提出が遅れたり、出さなかったりすることがある」の 5 項目である。これらは授業や学業に関する項目で、大学生活全般に無気力傾向が及んでいるわけではないということが

わかる。

さらに、実行されたサポートについては以下の点に注意する必要がある。まず、実行されたサポートの中でも、無気力低群と無気力高群で差が見られたのは友人からのサポートであるという点である。次に、仮説の検証において時系列で変化を見たときに、無気力低群は実行された友人サポートが多いにも関わらず無気力傾向が高くなったという点に注目したい。しかし、基本的には無気力傾向が高い人は実行された友人サポートが少なく、無気力傾向が低い人は実行された友人サポートが多いということも重要な点である。つまり、基本的には実行された友人サポートは知覚されたサポートと同じように無気力傾向を防ぐ効果があるといえるだろう。ただ、本研究からは実行された友人サポートは無気力傾向を防ぐだけでなく、無気力傾向を高めてしまう可能性についても示唆されたといえる。この点について筆者は、友人からのサポートが「社会的手抜き」を引き起こしている可能性があるのではないかと考えた。

以上の点から、無気力傾向が高くなったという事実がすぐに大学生活に対する不適応を意味しているわけではないと考えられる。むしろ、大学に入学して約3ヶ月の間に無気力低群の無気力傾向が上昇していることは、新しい環境である大学生活に慣れはじめ、新入生が友人と助け合いながら大学に対して適応していることのあらわれといえるのではないだろうか。

### 3. 仮説3の検証

ここでは、仮説3の「自己開示傾向が高い人は、自己開示傾向が低い人に比べ、知覚されたサポート、実行されたサポートが多いだろう。反対に、自己開示傾向が低い人は、自己開示傾向が高い人に比べ、知覚されたサポート、実行されたサポートが少ないだろう。」について検証を行う。

調査1および、調査2、3の結果から、ソーシャル・サポートと自己開示傾向には弱いながらも正の相関が見られた。さらに、自己開示2群別に知覚されたサポートと実行されたサポートについて比較検討したところ、自己開示高群の方が自己開示低群よりも知覚されたサポート、実行されたサポートがともに多いという結果となった。また、自己開示2群別に実行されたサポートの変化を確認したところ、自己開示高群は調査2と調査3の間で実行されたサポートが増えていることがわかる。

以上の結果を総合すると、ソーシャル・サポートと自己開示には関連があり、よく自己開示をする人ほど、知覚されたサポート、実行されたサポートが多く、あまり自己開示をしない人は知覚されたサポート、実行されたサポートが少ないといえる。また、よく自己開示をする人ほど、時間が経つにつれて実行されたサポートが増えていくことがわかった。したがって仮説3は支持された。

先行研究では、福岡(2007)が自己開示が多いほど友人から多くのサポートを受けていると指摘しており、本研究はその結果を追証するものといえる。



## V. 面接調査

補足的研究として面接調査を実施した。質問紙調査の回答者のうち、面接調査に応じてくれた5名に2012年9月に調査を実施。面接調査からは、サポート源となる友人と出会うきっかけとして授業が多く挙げられたこと、サークル活動が大学生活でのやりがいになっていることなどが明らかになった。また、無気力高群の学生であっても、授業の単位はしっかり取れており、友人サポートを得ながら学生生活に適応している様子が伺えた。

## VI. 今後の課題

今後の課題について、以下の点を挙げる。

1 点目に、本研究からは知覚されたサポートおよび実行されたサポートが大学生新入生の無気力傾向を防ぐことが示唆されたといえる。しかし、なぜ無気力高群は大学に入学した時点で無気力傾向が高いのかという点については、本研究のみでは有効な知見は得られなかった。そのため、今後は対象を大学生だけでなく、高校生にも広げて研究していく必要があると考える。

2 点目に、本研究からは実行された友人サポートは無気力傾向を防ぐだけでなく、無気力傾向を高めてしまう可能性についても示唆されたといえる。しかし、この点について大学入学後の半年間のうち3回にわたる質問紙調査の結果だけで検討することは賢明ではないと思われる。そのため、今後は縦断的な研究デザインを進展させ、大学生の無気力傾向についてさらに追跡研究することが大学生の無気力傾向とソーシャル・サポートの関連について理解を深める上で有益であると思われる。

## 謝辞

本論文を執筆するにあたり、指導教授の山口勝己先生に多大なご尽力を賜りました。心より感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

- Caplan, G. 1974 Support systems and community mental health. Behavioral Publications. (近藤 喬一・増子肇・宮田洋三 (訳) 1979 地域ぐるみの精神衛生 星和書店)
- Cobb, S. 1976 Social support as a moderator of life stress. Psychosomatic Medicine, 38, 300-314
- Cozby, P.C. 1973 "Self-disclosure: A literature review." Psychological Bulletin, 79, 73-91
- 榎本博明 1997 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- 遠藤公久 1989 開示状況における開示意向と開示規範からのズレについて ―性格特徴との関連― 教育心理学研究, 37, 20-28
- 福岡欣治 2000 大学生における家族および友人の知覚されたソーシャル・サポートと無気力傾向 ―達成動機を媒介要因とした検討― 静岡県立大学短期学部研究紀要, 14-3, 2-1-2-10

- 福岡欣治 2007a ソーシャル・サポート 坂本真士・丹野義彦・安藤清志（編著） 臨床社会心理学 東京大学出版会 pp100-122
- 福岡欣治 2007b 日常ストレス状況での友人への自己開示とソーシャル・サポート（3）—開示に対する友人からのサポートと気分状態の改善— 静岡文化芸術大学研究紀要 8, 25-30, 2007
- 福岡欣治 2007c 大学新入生のソーシャル・サポートと心理的適応 —自己充実的達成動機の媒介的影響— 静岡文化芸術大学研究紀要, 8, 69-77, 2007
- 福岡欣治 2010a ソーシャル・サポート 坂本真士・杉山崇・伊藤絵美（編著） 臨床に活かす基礎心理学 東京大学出版会 pp214-224
- House, J.S. 1981 Work stress and social support. Adison-Wesley.
- 稲村博 1989 若者・アパシーの時代—急増する無気力とその背景— NHK ブックス
- 笠原嘉 1997 新・精神科医のノート みすず書房
- 笠原嘉 2002 アパシー・シンドローム 岩波現代文庫
- 笠原嘉 1977 青年期 中公新書
- 久田満 1987 ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題 看護研究, 20, 170-179
- 丸井文男 1967 大学生のノイローゼ—意欲減退症候群— 教育と医学, 15, 476-483
- 大芦治・鎌原雅彦（編著） 2005 無気力な青少年の心 北大路書房
- 下山晴彦 1995 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, 43, 145-155
- 土川隆 1990 内山喜久雄・筒井末春・上里一郎（監修） スチューデント・アパシー 同朋社
- 鉄島清毅 1993 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討— 教育心理学研究, 41, 200-208
- 浦光博 1999 ソーシャル・サポート 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田裕司（編） 心理学辞典 有斐閣, p541
- Walters 1961 8. 学生のアパシー 石井完一郎・唄中達・藤井虔（監訳） 学生的情绪問題 文光堂 pp106-120